献学60周年記念イベント シンポジウム「小説家と考える文学教育」

http://www.icu.ac.jp/anniv60/
（他の献学 60 周年記念イベントについては 30-31頁でご報告しています）

2011年10月29日、東ヶ崎潔記念ダイアログハウス国際会議室において、かつてICUで学んだ小説家、髙村薫（直木賞作家）・奥泉光（芥川賞作家）の両氏を招き、献学60周年記念イベント「第1回Possibility of Doing Literature ―いかに『文学するか』―シンポジウム『小説家と考える文学教育』」を開催した。文学教育が世界的変動の最中にある実態に鑑み、ICU文学メジャーの教員は2008年度より、世界の大学における文学研究／教育の実態と実践について調査研究を進めている（科学研究費研究課題「リベラルアーツ教育における文学教育の歴史と可能性:国際的比較研究」）。今シンポジウムでは、髙村・奥泉の両氏に、文学研究と教育の意味を広く自由に論じてもらった。司会を務めた大西直樹教授（アメリカ文学）が当日の模様を報告する。

ここ2、30年の間に、日本の大学における文学教育はまったく様変わりした。例えば、ドイツ文学やフランス文学を専任教員が担当している大学は激減し、英米文学についても、かつては英語という言語を学びたい学生を多数集めた時代もあったが、英語運用能力については次第に文学とは別に英語教育が広範に受け持つようになり、何も英米文学を通して英語を学ぶことはない、と考えられるようになった。

さらに、就職と実学と資格が大学教育に強烈に求められるところとなり、文学だけでなく広く人文科学系の学問に対する人気が長期低落傾向にあることは否めない。

こうした問題は日本特有の現象なのかどうか、さらには文学研究や文学教育のあり方を見極めたいと、科学研究費の援助を受けて、イギリス、アメリカ、フランスなどの現状を調査するなかで、「文学経験のごく少ない学生に対する、作品の与える感動を無視した、文学研究が先走るような教育のあり方を見直すべきではないか」という一つの方向性が見えてきた。つまり、文学の実践である。作品をめぐる創作活動、あるいは朗読、実演、そして、アメリカの大学ではよく行われているクリエイティヴ・ライティングなどをどう文学教育に取り入れていくことができるのか、という課題が浮かび上がってきた。

そこで、作家として大活躍のお二人に、これら問題点のほか、作家となるきっかけ、ICUで学んだことと作家活動の関連、創作活動の実態の一面、などを加え、かなり本音に踏み込んだお話を伺った。

意外なことではないかもしれないが、お二人は共に大学時代には文学専攻生ではなかった。むしろリベラルアーツの利点を使って、奥泉氏はマックス・ウェーバー、髙村氏はフランスの構造主義哲学に傾倒されていた。卒業論文も文学には直接関係のない領域を選ばれている。

にもかかわらず、お二人の作品は幅広い知識と調査に基づく情報に支えられて、しかも、お二人とも文学理論が創作のヒントとなることが多い、と言う点を述べられた。大学における文学研究と教育は、こうした文学の現場ともっと関わりを持ちながら展開していくことに活路が見出されるのではないか、という印象を強く与えた機会となった。

シンポジウムで意見を交わす髙村氏（右）と奥泉氏

60th Anniversary Commemoration *Possibility of Doing Literature Symposium* Report Authors Talk About Literary Education

From 2008, the Faculty of Literature have been working on a government-funded project to compare literary education in universities around the world. (Grant-in-aid for Scientific Research: "The History and Potential of Literary Education in Liberal Arts Education"). On October 29, ICU organized a symposium entitled "Possibility of Doing Literature," inviting alumnae novelists Kaoru Takamura (Naoki Prize Laureate) and Hikaru Okuizumi (Akutagawa Prize Laureate) to talk about the meaning of literary research and education. Here Professor Naoki Onishi reports on the symposium.

In the last two or three decades, literary education in Japan changed dramatically. Students study the English language but not the literature. In an era of economic stagnation, university education is widely perceived as a means to acquire jobs and qualifications, the popularity of the humanities including literature long on the wane. Simply put, the young literary enthusiasts we used to see so many of no longer exist.

The study compares the situation in Japan, U.K., U.S. and France, to find out if this is a problem particular to our country. One thing is clear: literary education should convey the deep emotional experience acquired by reading the classics. This also relates to how we should incorporate creative writing, readings, and writing workshops in literary education as is done in the U.S.

The novelists talked about how they started writing, their opinion about the problems in literary education, what they learned at ICU that helped them in their career, and tips about creative writing. At ICU, Okuizumi concentrated on Max Weber, and Takamura, on French structuralism. Both authors agreed that literary theory often provided hints for their works. Literary studies and education should be invigorated through contact with authors creating literature.